



「あ、母さん？ 大変なことになっちゃったよ……。車で事故起こしちゃって。俺の不注意で歩行者と接触して、相手が地面に転んじゃって。……いや、その人は大丈夫命に別状は無いんだ、……でも、ちょっと困ったことがあって……。その人、妊娠してるんだ。だから、そのお腹の中の子供が無事かどうかわかんないんだよ。それで、今、病院で検査してもらって、ちょっと破水してるらしいんだ。それで、緊急で帝王切開の手術をするって……。いや、相手の弁護士だって言う人が来てるんだ。俺？今警察にいる。大丈夫かどうかなんてわからないよ！ねえ、母さん、俺、逮捕されんのかなあ？ 相手の弁護士は、母子の安否が確認でき次第、示談交渉をするって言ってるんだ。……そう、そうなんだ。とにかくお金がいるんだよ。でも、俺がそんなにお金もってるわけ無いだろ？……ごめん、そう、まとまった金を用意しておいてほしいんだ。あ、ちょっと待って、弁護士が何か言ってる。……うん。また、すぐあとで電話するから」

という感じで俺は毎回馬鹿なジジババから金をせしめるわけなんだが、別に罪悪感はない。なぜかといえば、年金やら社会保障やらで、俺たち若者はジジババから金をせしめられているからだ。つまり、俺はパクられたものを取り返しているだけのことで、こんなオレオレ詐欺で金を取られるやつは始めっから金を稼ぐ能力はあるわけもないし、結局身分相応の金が残ることになるってわけ。逆に能力のある俺は年金やら社会保障、雇用機会や経済不況で失っている金を手に入れて、身分相応の金を稼ぐことになる。シンプルなお話だろ？馬鹿でも分かる。ああ、もちろん騙されてる馬鹿なジジババにはわからんだろうけど。

しかし、こんな世知辛い世の中でも、子を思う親なんてのは結構いるもんだ。そういう愛ってやつ？のおかげで俺は金を手に入れてるわけなんだし。愛は偉大だね、マジで。

そこでなんだが、俺はあることを思いついた。思いついた瞬間、これは傑作だと思ったね、自画自賛で悪いんだけどさ。そのアイデアってのは、俺の親をオレオレ詐欺にひっかけること。オレノオヤオレオレ詐欺ってわけだ。

いやいや、勘違いされちゃ困るんだけど、俺は別に自分が親に愛されてるかどうかなんてのを確かめたいわけじゃないんだ。そりゃ俺にとってどうでもいいことだ。ドライなもんだぜ、俺の親子関係なんて。互いの存在が希薄なのさ。基本的に会話はない。かといってケンカもしない。要するに、血縁に対する執着なんてもんがないってこと。縁の深い親子なら、仲が悪くてもケンカするはずなんだが、俺と親の間にはそれが無い。ほぼ他人。ひとことで言うならね。実際の話、もう10年くらい会ってない。

だからこそ、余計に興味があるんだ。俺が俺の親をオレオレ詐欺に引っかけたら、俺はいったい何を感じるんだろうってね。普段と変りないのか、それとも何か面白いことが起きるのか。パパママごめん、なんつって泣いちゃったりして。そりゃないっつーの。笑うぜ。

ま、とにかく予想ができねーんだ。だからこそやる価値があるんだけど。そんじゃあ、いっちょやってみっかね。

両親とは、高校卒業以来会ってない。最後に会話をしたのは大学を卒業する時、電話で就職しないといたら文句をたれやがったんで、一方的に切ってやった。俺はそこからオレオレ詐欺の名手でそれなりの金を稼いでたんで生活費や遊ぶ金にさほど困ることはなかったから、就職なんて馬鹿げたことをしなくてよかった。

ってなわけで、五年ぶりくらいに電話をするわけなんだが、奇妙な感じだ。俺はこれから俺の親に対して電話をすると同時に、詐欺で騙す相手に対して電話をするわけなんで、どんな風に電話しようかと一瞬考えた。結局、詐欺で騙す相手と同じような感じでいくのが良いって判断になったけど。俺が今からやんののは、パパママへのラブコールじゃなくてオレオレ詐欺なわけだし。

プリペイドの携帯電話で実家の電話にかけると（いやしかし、いまだに俺の指が電話番号を覚えてるのがすげえと思ったね。もう五年もかけてないのに）、出たのは母親だ。

「もしもし」

と第一声。普通だな、お前は。芸がねえよ。まあ、当り前の反応なんだが。

俺はさりげない緊迫感を演出する下地としての一瞬の沈黙をはさんだ後、「あ、母さん」と発声する。それから、俺はきっちりと演出されたストーリーにそって事故で接触した危篤状態の妊婦と示談の可能性がどうのこうのとまくしたて、弁護士と警察と妊婦の旦那役を務める詐欺グループのメンバーに電話を交代しながら自分の母親をだますべく演技をこなした。

そこまでやったのに、どうも母親は俺のことをやや疑っているふしがある。俺が嘘をついている可能性と、俺がオレじゃない可能性についての疑いだ。しょうがないんで、「小学生ん時、プールで溺れそうになった俺を母さんは助けてくれたよね」なんていう実際にあったエピソードをさりげなくはさんでみたりして、俺がオレであることの信憑性を高めておいた。

俺はとにかく金の振込み先を指定して電話を終らせた。後は、優しいお母様が愛ってやつの名のもとに俺にお小遣いをくれるのを待つだけだった。

しかしだ、それから二日間、母親は俺に金を振り込んでこなかった。ふざけんなクソババア。俺は辛抱強く待ったんだが、しびれがどうにも切れてきたんで、自分から電話してやろうと携帯電話をつかんだ。プリペイドじゃなくて、俺がレギュラーで使ってるやつだ。もしかしたら、

ナンバーディスプレイなんて小賢しい機能が付いた電話をいつのまにか買ってやがったのかもしれないねえ。俺の携帯と違う番号が表示されたせいで、母親の野郎は疑いを持ったのかもしれないねえな。

そう思って再び電話をかけようとした瞬間。その携帯に向こうから電話がかかってきやがった。俺は一瞬うろたえながらも、携帯の画面をじっと見て確認する。まちがいねえ、俺が二日前に入力したのとそっくり同じ、実家の電話番号だった。

「うぜえよ馬鹿！」と携帯に悪態をついた後、俺は軽く深呼吸をしてから、その電話に出た。

電話は親父からだった。案の定、俺にたいして本当に金を振り込んでいいものか迷っていたらしく、本当に俺が事故を起こして困っているのかどうか確認したかったらしい。躊躇すんな馬鹿。さっさと振り込めよ、実の息子だぞ。

俺は半泣きの演技で親父に窮状をセツセツと訴えたんだが、かえってそうするほど親父は態度を大きくして、とうとう俺がこういうことになったのもちゃんと就職しなかったからだと説教たれはじめやがった。「どうせフリーターでもやっててギリギリの生活なんだろ」と見下した口調で言いやがる。ふざケロヨン、クソジジイ。俺の年収はそこらのサラリーマンの倍以上だつーの。オレオレ詐欺のプロをなめんな。

めちゃくちゃムカツいた俺はもう我慢できなくなって、「うるせえんだよいい加減にしろ！」と叫んで電話をぶった切ってやった。しょーもね一親だぜ。ボケカス。子は親を選べねえってのはそのとおりだよ、まったく。

そっから俺はむしゃくしゃが止まんなくなって、外へ出ると車をぶっ飛ばした。トロクせえ車を後からあおってやった。初心者マークつけてんじゃねえよ。真面目か。次はタクシーに強引な割り込みを仕掛ける。客乗せてるから無茶できねえんだ、こいつらは。

他にも原付乗ったババアに幅寄せするとかやって遊んだ後、俺はちょっと気分がせいせいしたんで帰ることにした。口笛ふいていい気なもんだったけど、ちょっと油断してたみてえだ。左折したところにちょうど女が歩いてて軽く接触しちまった。

クツツやべーな。俺は舌打ちする。まあ、そんなにえげつない当たり方はしてないし、相手もちよっと転んだくらいだろ。さっさと謝って、治療費くらいは払ってやろう。そう思って車を降りた俺、さすがにビビったね。なんとまあ、若い女が大きなお腹を押えて地面に転がってやる。妊婦かよ。ふざけてんな、オイオイ。

さすがに逃げようかと思った。普段俺がさんざん他人を騙してきたシュチュエーションそのものじゃねーか。しかし、俺はそこらの馬鹿より冷静だ。ここで下手に逃げれば、警察が俺の周辺をかぎまわってオレオレ詐欺が摘発されるなんてことになりかねない。だから、ここは踏みとどまって、不幸な事態に誠実に責任を取ろうとガンバル青年を演じきるしかない。

俺は緊張感を覆い隠そうとニヤついてしまう口元をなんとか押さえながら、周囲をうかがう。目撃者はいなさそうだった。車のドアを開け、うずくまった妊婦を見下ろす。とにかく、やるしかねえ。俺は気合を入れようと思って、一度でっかく深呼吸をした。

「大丈夫ですか！」俺は取り乱した様子を表現しながら叫ぶ。自分で警察と救急車を呼んで、相手の家族と病院で会い、ひたすらに涙を流しながら頭を下げた。幸い母子ともに無事だったのと、俺の作戦が功を奏したのとで、相手は溜飲を下げて示談に応じることになった。

まあ、そんなこんなで無事やりおおせたわけなんだが、しかし払う示談金は別に安い金じゃない。だから、俺は両親が俺の口座に金を振り込んでくれるのを待っていた。

それからついに一週間が過ぎても、金は振り込まれてなかった。あのクソ親父のことだ、どうせ俺が困り果てた末に泣きながら詫びを入れるのをふんぞり返って待ってやがるんだろう。馬鹿が。

俺は携帯を手にとってじっと見つめていた。実家に電話をかけるかどうか考える。しばらく考えた。そして、俺は結局電話をかけることにした。でも、相手は自分の親じゃない。他人の親だ。

「……………あ、母さん？……………」

俺は自分が実際に事故を起こしたことでさらに磨きのかかった演技を駆使して、新しいカモを引っかけることに成功した。俺と仲間の口座にはまとまった金が振り込まれ、俺は自分の示談金をあっさり用意することができた。

別に最初からこれで良かったんだ。俺は自分の親にこだわる必要はなかった。「親」なら誰でも良かったんだ。世の中には無数の親がいて、無数の子がいる。その二つの役割が組み合わせられれば、親子という機能が果たされる。今の世の中、実の親子かどうかなんてのは、すでに無意味になっている。だってそうだろ？そうじゃなかったら、なんでオレオレ詐欺なんて商売が成り立つんだ？みんなそのことに気付いてないだけだ。

俺は詐欺グループの仲間と成功を祝うために、街中へ飲みに出かけることにした。居酒屋について、注文したビールが俺たちの前に並ぶ。仲間の一人が、俺に乾杯の音頭をとってくれと言いつ出した。他のやつらもそれに乗じて、「最近調子の良いお前にやって欲しいんだけど」と笑う。俺はそれに応じて立ち上がる。

「俺たちの親たちに乾杯」

俺はそう言ってグラスを仲間たちに向かって掲げる。すると、仲間たちはみんな大笑いしながら「乾杯！」と叫んだ。俺はとてもいい気分だった。

やっぱり、こいつらは良く分かってる。俺は心からそう確信した。